The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディープエコロジーにおける感情の深化と「保存」について
Author(s)	河村, 厚
Citation	臨床哲学. 2003, 5, p. 62-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディープエコロジーにおける感情の深化と「保存」について

河村　厚

1970年代前半にネス(Arne Naess:1912－)によって創始され、80年代以降、北アメリカを中心に、様々な文化的・政治的運動と深く繋がりながら大きな展開と影響力を見せてきたディープエコロジー(運動)は、その一方で様々な誤解と批判に晒されてもきた。中でも有名なのは、社会的視点や女性的視点の欠如を批判したソーシャルエコロジーとエコフェミニズムからの批判である。また人権と民主主義に抵触する危険な反ヒューマニズム思想であるとするL.フェリの批判も有名かつ典型的なものである。日本においても数々の批判がディープエコロジーに向けられてきたが[1]、その中には誤解に基づく批判や感情的なアレルギーも見受けられる。ディープエコロジーは、このような批判に向かい合いながら、様々な文化的・環境的ムーブメントとの繋がりを深めて多様な展開をしてきた。しかし本稿では、ノルウェー語で1998年に書かれ2002年に英訳が出版されたネスの『生きることの哲学――より深い世界における理性と感情』という著作を中心に、彼の「感情の深化と成熟」の問題を考察しつつ、ディープエコロジーの理論的基礎を確認したい。

Ⅰ.「感情なしには何も変らない」――受動感情の使用価値

ネスの「生きることと感情の哲学」はスピノザに多くを負っている。スピノザは、「人生の中で感情が果たす決定的な役割を理解するのを助けてくれる」(Naess,2002,p.9,74)。こうして、スピノザ由来の受動感情と能動感情についても、ネス流の解釈が加えられていく。ネスによると、ネガティブな感情(受動感情)は人間本性を受動化し、ポジティブな感情(能動感情)は能動化する(ibid.,p.9-10)。ここで、受動的感情の「受動的passive」という言葉は、我々の本質(本性)を発展させないということを意味し、能動的感情の「能動的active」という言葉は、我々の本質(本性)を発展させるということを意味している(ibid.,p.76)。よって、人は「活動 activity」を行いつつも「能動性activeness」の状態にはないという事態がありうる(ibid.,p.3,76)。

スピノザは、「希望」は人間の本質を能動化しないから受動感情であるとした。それは「喜び」の一種に違いないが「快感titillatio」でしかない(注10参照)。スピノザの「希

望」批判は、事態がよくなることを単に希望することに甘んじているのではなくて、それについて自ら何かを行うべきであり、能動的にならなければならないという、「感情の成熟」において逞しくあることの要求からなされたものだ(ibid.,p.77,166-167)。これに反してネスは、「希望」は断固として能動感情であると主張する。「自らの本性に合わせて一つの目標を達成しようと努力する時、その目標への我々の関係は能動化されるのである」(ibid.,p.77)。ネスのこのような考え方は、いかに絶望的な状況にあっても、強い信念と意志でそれを克服するための実践的行動を起こし、闘い続けたガンジーからの深い影響であるとともに、彼自身の成熟した「オプティミズム」の現われでもあろう(ibid.,p.2,6-7,85,89-90)。

感情なしには進歩はない。前進したいなら、アピールする何か、「よいと感じる」何かが必要だ。ネスによると、スピノザは倫理学を、「感情が欠如したら、我々の人間としての発展が停滞してしまうというような仕方で敢えて構築した」。スピノザによると、我々を行為へと駆り立てるのは思考であるが、思考が感情を刺激してはじめて何かが起こるのである。こうして「感情なしには何も変らない」という仮説が提出される。「自由への道が要求するのは、感情を貫いたモチヴェーション、あるいはスピノザの言い方では、感情の変換」なのである(ibid.,p.9,77-78,81)。

確かに、受動感情を能動感情に変換することは、感情生活の成熟のプロセスにとって大きな重要性を持ってはいる。だが、そのような成熟のプロセスにおいて受動感情(ネガティブな感情)が有する意義とは一体何なのだろうか。ここでまずネスが挙げるのは、「怒り」と「恐怖」という受動感情である。自らのこの上なく快適な場所が、破壊・汚染され開発されてしまうというような事態に直面した時に生まれる「怒り」と「恐怖」という感情が、行動への決定を、つまりその環境破壊に対する中止運動に参加するという決定を引き起こすことがあろう。またネスによると、スピノザは、抑圧感、不安、不幸感等の受動感情(ネガティブな感情)がついてまわる挫折などの苦しい体験が人生を深く成熟させるということへの考察を省略してしまっている。「ネガティブな感情〔受動感情〕からポジティブな感情〔能動感情〕への移行もしくは転換が成し遂げられることで、前者の複雑な機能が否定されるようなことがあってはならないし、この移行が威厳ある人生の枠組みにおいて必要不可欠なものであると見なされてはならない」(ibid.,p.79)。このように人生の中において、受動感情にも一定の意義や価値が見出される。しかし、それはあくまで「内在的本質価値」ではなく、「使用価値」もしくは「機能的価値」に過ぎない。ネスによると、スピノザの弱点は、いくつかの受動感情については、その「使用価値」を一応は認めてはいるが、この問題を更に突っ込んで検討しなかったことである(Naess, 1973b,p.256;2002,p.80)。

著者は、ネスの「一体化(同一視) identification」(本稿V)は、スピノザ的に言えば、「感情の模倣」を克服していない受動感情のレベルでの出来事であり、ネスはスピノザの感情理論からは何も吸収していないと述べたことがある(河村,2001,p.115-116)。しかし、ネスは自覚的にスピノザ感情理論の不備を批判し、或る種の受動感情(と感情の模倣)をエコロジカルに評価したのであった。では、いかなる状況で「一体化」は起こるのであろうか。ネスは、「それは一体化(同一視)が強烈な共感・感情移入(empathy)を誘い出すような状況である」と言いつつ、苦しみ死にゆく一匹の蚤と遭遇した自らの経験について、「私が感じたのは、痛みを伴った同情と共感であった。ただその共感はベーシックなものではなく、一体化のプロセスであった。すなわち私は『その蚤の中に自分を見たのです』」(Naess, 1987,p.15)と語っている。

II．感情と理性の関係

今日の“reason”(理性)は、スピノザの時代の“ratio”とは大きく異なる。“ratio”の方は、正しい選択を指し示すし、直観と関係する。また、感情、特に「神への愛」とも結びつくから、現代の“reason”と比べると、感情の地位を高めることにもなる。これに対して,“reason”の方は、感情の意義に否定的である(Naess, 2002,p.10,84,86,87,89)。

我々の社会では、不幸なことに理性と感情の間に大きなギャップができてしまっている。一方には、冷たい理性があり、他方には、暖かいが、しばしば統御不能で近視眼的になってしまう感情がある。これに対しスピノザの“ratio”の意味での理性は、陳腐でありふれたものを計算するような冷たいものではない。理性と感情を対立的に捉えてしまうという罠を回避する構想と可能性を与えてくれるのはスピノザである(ibid.,p. 16)。例えば、「私が従うべきは、自分の感情かそれとも理性か」という問いは不適切な問いである。それは感情がないなら、行為へと駆り立てるものも存在しえないからである。現実には、行為の決定や選択には感情と理性の両方が要請される。その際に我々に必要なのは、感情と理性を“ratio”の意味において常に統一するということ、つまり、両者が我々の存在の深い所で内的に関係しつつ合同するようにするということである(ibid.,p.12,14,16)。このような「理性と感情の収斂」の達成は、「極めて狭い意味での知性の発達が、感情の発展に比べて余りにも大きな役割を受取ってきた感のある我々の社会の一つの目標であるべきである」(ibid.,p.85)。そして今、理性と感情が互いに支え合うようになる「社会における変化」が必要とされている。それは科学技術システムと経済システムにおける変化であるのみならず、産業社会のあらゆるアスペクトに関わるような変化である(ibid.,p.6-7)。このような変化が実現されるためには、感情と理性の

成熟(深化)がなされなければならない(ibid.,p.4)。この「感情の発展と成熟」は、知識のそれと同様に社会的に重要であり、真剣な公共的議論を踏まえた上で、学校や大学において教育プログラムとして進められるべきである(ibid.,p.18)。

III. 理性の声を聴くということ

ネスによると、より大きな自由への途上で我々を助けてくれる、我々の内なるコンパスのことを、スピノザは“ratio”(理性)と呼んだ。行為の重大な選択に直面した時に、“ratio”は、どの選択が正しいのかーつまり人間の本性(本質)に合致するのかを指し示す(Naess,2002,p.10,86)。このように「理性の声 voice of reason」として考えられた“ratio”は、言葉として聴こえてくるようなものではなく、感情を通して伝わる「良心の声」や「内面の声」と呼ばれるような人間本性としてイメージすべきものである(ibid.,p.10,86,89)。スピノザによれば、人間本性とは、“ratio”が正しいものとして示した行為の選択が、受動感情ではなく能動感情に基づいた選択となるようになっているようなものである。このようにして“ratio”は、我々がネガティブな感情をポジティブな感情へと変容させるのを手伝う。この「理性の声」を聴くのは簡単でなく、注意深く聴かないとその声は弱くなってしまうのだが、それを聴く能力を発達させることはできる(ibid.,p.10-11)。

産業革命以降、この自由な「理性の声」は、取るに足らない事柄に対する、中身のない合理性(rationality)の声へと縮減されていった。ニュートンの時代以降は、合理性は、価値についての思考ではなく科学や論理と密接に関係してきた。そして今日の合理性は、道具的、技術的になってしまい、その目標は短期的で、究極的な価値には関係しないものとなった(ibid.,p.87-88)。

しかしながら前章で見たように、感情と共に理性も動員される「行為の決定や選択」は、価値の選択に基づいてなされる。従って「感情と理性は、我々が人生をそれに基づかせるような根本価値の文脈に組み込まれていなければならない」し、「人生の根本的な価値や目的と一致しないようなものは、理性的(rational)ではない」(ibid.,p.16,88)。また社会的な様相においては、政策や政治プログラムは、社会がそれに基づいて形成されるような最も本質的で深遠な前提(規範・目標)との関係においてそうである場合にのみしか、理性的でありえない[2](ibid.,p.3,88)。政治論争において、明白な意見の衝突があったとしても、それが根本原理的な目的の本性についての不一致であることは稀である。これは人生や社会の最も根本的な価値についてはあまり議論されてないということである。例えば、消費がこのまま増大し続けたら、いかなるエネルギー形態が採用されるべきか

についての(表層レベルの)議論は多くあっても、社会の個々の成員がエネルギー使用を減らすようにすべきではないかというようなことが論議されるのは稀だ(ibid.,p.88)。

IV. なぜ自然を保護するのか

「自然をそれ自体のために保護するのは全くの偽善である」と主張する者は、そこには常に「人間の必要」が入り込むということを根拠にそう言う。これに対してネスはこう反論する。北ラブラドール地方の汚染されていない不毛の地の何千というサポーターは、これらの土地が今あるように存在し続けるのを「それ自体のために」ただ願っているだけなのだ。この土地には「使用価値 instrumental value」のみでなく「内在的本質価値 intrinsic value」があり、この状況を説明するのに「人間の必要」に訴えるのは間違いである (Naess,1973b,p.257-258)。

しかし、自然に「内在的本質価値」があるという事実のみでは、それを保護するという行為のモチヴェーションは説明できない。自己実現と一体化による「自己」の深化と拡大の過程において、拡大し深化した「自己」愛によってこそ、自然の他の存在(生命)の自己実現を手助けしようという感情は説明できる(本稿V)。「拡大した自己を持つ成熟した個人は、普遍的な自己実現の権利を認め、あらゆる種類の存在にとってのこの自己実現の潜在的可能性が最大化されるような社会の秩序あるいはむしろ生命圏の秩序を求める[3]」(ibid.,p.257 傍点河村)。自己以外の存在の「内在的本質価値」は、「自己」の深化と拡大の過程において、全生命の根源的な平等性と「相互連結性」を自覚すること(関係主義的・ゲシュタルト的自然観への転換)によって発見されるようなものである。しかし、このような全体論的(ホーリスティック)な自然把握と「一体化(同一視)」は「個別性」(各存在の本質の展開としての各々の自己実現)を解消しないから[4](Naess,1989,p.165, 173,198;井上,1999,p.99)、利己と利他の対立は止揚されつつも、各存在者の「内在的本質価値」はそれ自体として認められることになる。こうして初めて、人間の「使用価値」を離れて、「自然をそれ自体のために保護する」ということが可能になるのである。

V. 自然保護の根拠は「自己」の成熟と深化から必然的に生まれる

ネスは、人間の本質が深まりを見せることとしての「成熟 maturity」を「一体化(同一視)」を伴った「自己実現」によって、自己が拡大し深化することであると考えている。ネスは、「自我(エゴ)」、「社会的自己(セルフ)」、「形而上学的自己(セルフ)」という三段階を経て完成されるような従来からあった「自己の成熟」論では不十分であるとして、自然や他の生命との「一

体化(同一視)identification」を含んだ「エコロジカルな自己(セルフ)」を、更に深い「成熟」の段階として付け加える。ネスによると、「自己実現が進むとは、自己(セルフ)が広がり、また深みを増すこと」である。そして「成熟すると共に、他のものとの一体化(同一視)が不可避のプロセスとして生じるから、自己(セルフ)は拡大し深化する。我々は『他のものの中に自分を見る』」ようになるのだ[5] (Naess,1987,p.14)。

この「一体化(同一視)」は、主体としての自己(セルフ)が、客観的対象としての自然(生命)に、一方的に自らを「同一化するidentify」というような行為ではない。自己(セルフ)によって対象化され、認識される前から、そもそも自己(セルフ)と自然(全生命)は密接不可分に繋がり合っており(「相互連結性」)、それぞれの自己(セルフ)は全ての生命を包含している。この「始源的な繋がり」を「悟るrealize」という行為こそが「自己実現self-realization」であるがゆえに、それは「一体化(同一視)」を不可避に伴うのだ(スピノザの有機論的自然観と「神への知的愛」の影響) (ibid.,p.25)。そして「一体化」された存在もまた「生き開花する平等な権利」としての「自己実現」を有しているから(「生命圏平等主義」)、「自分が一体化した他のものの自己実現が妨げられると自分自身の自己実現も妨げられてしまう。それゆえ我々の自己愛は、『自ら生き、他者も生かす』という原則に従って、他のものの自己実現を助けることによってこの妨害と戦う」(ibid.,p.14)ということになる。このような「自己」の深化と成熟(自己実現)は、自己否定を一切伴わない自己肯定と自己の本質(潜在能力)の展開によって達成される(スピノザのコナトゥス論の影響)[6]。

この「一体化」と「自己実現」による成熟論の倫理学的帰結は、「極めて未熟なものではあるが避け難いゼロ地点でもある利己的行為(ego-trip)から始めて、自己(セルフ)を深め広げるという観点」を進めていくと、「利己主義egoism」と「利他主義altruism」の対立は徐々に解消されていくということである。狭隘な「自己self」概念に基づく「利己ego」主義は「利他主義」と対立・矛盾するかもしれないが、拡大し深化した「自己(セルフ)」概念に基づく「自己愛self-love」は「利他主義」と対立するものではなくなっている。そこでは、「自己」を肯定することはそのまま他者を肯定することになる。

次にそのエコロジカルな帰結とは、「自分が自然を愛していることを示すために、非利己的に自らの利益を捨てたり犠牲にしたりさえしていると人々が感じるなら、そのような環境倫理は、長い目で見て自然保護の基礎としては覚束ないであろう」が、「一体化(同一視) を経れば、純粋な自己愛、つまり拡大し深化した自己の愛からであっても、自然保護によって自らの利益が守られると思うようになるかもしれない」(ibid.,p.17,25)というものである。わかりやすく表現すると、「(自分自身の一部である)この場所が破壊されるならば、私の中の何かが殺される」(ibid.,p.20)ということである。

以上から、「なぜ自然を守るのか」という根本的な問いに対して、社会的文脈に配慮す

ればこう答えることができる。「偽りなく自己を見つめた後に、最奥の自己が脅かされているという感じを持つならば、(自然保護は)強力になる。そして、自分の外部の何かを守るというのみならず、生命に関わるほど重要な利益(vital interest)をより大きな確信をもって守るようになる。我々が従事しているのは自己防衛なのである。これは基本的人権を守るということであり、生命に関わるほど重要な自己防衛なのである[7]」(ibid.,p.21)。こうして、我々は「自己」が深化すると必然的に自然保護に向かうようになっているような存在であり、自然保護は究極的には当為の問題ではない。

VI.「生きることの技法art of living」

我々の感情は予測不可能なものである。また感情は所有される対象ではない。感情は我々自身と世界との出会い(遭遇)から生まれるが、この場合、世界と我々の間にははっきりした境界線は引けない。我々が感情であり関係性である のだ。だから自己の外部に立つことはできない。我々が一体化(同一視)する思想、感情、関係性は、我々自身の一部なのだ(Naess, 2002,p.15,170)。

常に流れている生の「運動motion」性の根拠に、このような「感情emotion」の流動性がある(ibid.,p.1,78)。ここからネスは、人生を「開かれた風景」を通る旅として考える。生と自己は一つになった流れそのものであるから、生を対象化して固定的に捉える紋切型の既成の人生哲学では対応不可能である(ibid.,p.3)。そこでネスは、自らの「生の哲学」を「感情の哲学」として、「開かれた風景」を「生きることの技法」として展開する。

ネスの言う「生きることの技法art of living」とは、人生の多くの障害に立ち向かう術である。「生きることの技法」に長けているとは、他人の幸福の享受を邪魔することなく、自ら幸福な人生を送る能力を持っているということだ。人生は、たとえ多くの恐ろしい出来事と悲惨な瞬間に染められても、幸福と呼ばれるに値するものであろう。人生の中で、ポジティブな変化が、不愉快な出来事の長期的な影響の結果として起こったと語る人も多くいる。ネスは、スピノザやガンジーと共に、人間本性の発展可能性に対する「オプティミズム」を固く信じている(ibid.,p.2,85,89-90,160-162)。

ネスは、肉体的には様々な苦しみを抱えながらも快活さや生に対する熱意を保っているような老人達に、最良の「生きることの技法」を見て取る。この老人達は、若い頃なら怒ったり精神の崩壊を招いたであろう絶望を克服している。ずっと少なくなった生命力を考慮に入れてさえ、よりよくなっている、とか立ち向かっているという感情は、人が持ちうる最高の感情の一つである。ネスは、「生きることの技法」とは「小さいことを

大きな仕方で行う」能力であるとも言うが、それはこのような老人評価とも深く通底した「小さいものの中に偉大なものを見る」という発想であろう(ibid.,p. 17,162)。

ネスは、或る本の中に登場する老女に、この「小さいことを大きな仕方で行う」ということの真理を見ている。それは、南欧のとある古村で、尊敬の念を禁じえないほどの威厳に満ちて、ただ座って籠を編んでいる一人の老女の姿である。「彼女は、それがあたかも人生における唯一の事柄であるかのように自らの仕事に夢中になっている」。彼女こそ、内的平安と幸福を成就した人間、人生の仕事をいかにして実行するかを、つまり「小さいことを大きな仕方で行う」ということ悟った人間である(ibid.,p. 165)。

「成功と高い生活水準は必ずしも高い生活の質をもたらさないということに、我々は今や痛いほど気付かされている」(ibid.,p. 174)。この老女のような人間は、溢れんばかりの物と情報にどっぷり浸かった「豊かな」都市生活を何の疑問もなく送っている人々の中には存在しえないとネスは言いたいのだろう。豊かな国々での「生活水準」から「生活の質」へのシフトが求められる。しかし、「生活水準を落として、身の回りの物の数を減らす」ことによって、その数少ない(本質的な)物とのよりよい関係性を築くことが容易になるという「質素な手段での豊かな生活」こそが、「現実に生活の質を上げる」というネスの言葉を聞く時、生活や人生というものの多様性を余りに軽視しているのではないかという危惧を感じてしまう。ただ、ネスによると、そこには決して禁欲主義は存在せず「喜び」はむしろ深まっているのだ(ibid.,p.167-170)。

VII. 環境保護運動における「喜び」の感情の重要性

ネスによると、スピノザは「憎しみ」等のネガティブな感情を批判すると同時に、「行為への断固とした拒絶」と「憎しみ」の間の区別を強調した。例えば、拷問のような恐ろしい「行為への断固とした拒絶」は、行為手段としての拷問と闘う運動へと発展するかもしれないが、拷問する「人を憎む」という結果にはならない。スピノザの考えでは、拷問する人は因果連鎖の中で有害な因果要因に捕まっているだけなのだ。このことを理解することによって、「憎しみ」を他の何かに転換するのは理性の役割である (Naess, 2002,p.11)。どんなに悪い運命に捕らえられている人でさえ、ポジティブな感情の能動化を保証してくれる人間本性の最良の部分は失わない。多くの聖者達が若かりし頃は不運な境遇にあったではないか。スピノザ(とガンジー)の観点からは、ネガティブな感情としての「行為を行った人への軽蔑」とネガティブな判断としての「行為そのものへの軽蔑」は区別されなければならない。このうち、ネガティブな感情からポジティブな感情への「変換」によって取り除かれるのは前者のみである。この視点はソーシャルワー

カーや聖職者等の職業にとっては極めて大切なものである。結局、スピノザとガンジーの考え方から、我々は「人に対するあなたのネガティブな感情をポジティブな感情へと変化〔変換〕させなさい。あなたの敵の資質の中の善なるものに訴えて・・・」という根本原理を受取る。ではこの「移行」(変換)の報酬とは何であろうか。それは例えば「喜び」の感情である(ibid.,p. 89-90)。

この「喜び」は、ネスの世界観の中で、愛や幸福と同じかそれ以上に重要な場所を占めている。スピノザの「喜びの哲学」によると、喜びの状態は、基本的には感覚ではなく「プロセス」である。喜びに満たされているということは、その瞬間にあなたに出現している世界を楽しんでいるということなのだ。そこで生じているのは、感情ではなく、世界を知覚することにおける変化である。その時あなたは、喜ばしい「世界」を、それゆえあなたの「内部のみにある何か」ではなく、喜ばしく「ある」何かを経験する。「喜ばしい」とは世界がどのように感じられるかを叙述した形容詞であって、感情そのものの叙述ではない。世界とあなたを互いから完全に切り離すことはできない。スピノザの時代には、感情とその「対象」の間に今のような明確な区別はなかったので、「対象」から孤立しうるような喜びの感情なんて理解できなかった。まずここに直径とか高さのような特徴をもった花があり、次にその花を見て喜ぶのではない。花そのものが「喜ばしい」のだ。我々自身、花、喜び(楽しみ)そのものの三者が一緒になって破壊できない一つの全体を形作っている(ゲシュタルト)。スピノザに即して言えば、彼は「実在性」を機械論的にも価値中立的にも考えていなかった。スピノザのように、「喜び」や他の「主観的」と言われる現象(価値など)を「実在性」という全体的な統一場(natura)の中に置き入れることによって[8]、ガリレオ以降の近代科学によって生み出された「価値の世界」と「事実の世界」の裂け目は理論的には克服できるのである[9](Naess,2002,p.171-175;1973b,p.253-255;1989,p.83)。

スピノザによれば、「喜び」によって、人間はより大きな「完全性」(ネスの言葉では統合、全性、成熟)へと移行する。しかし、上述の実在論的な「喜び」観によれば、「喜び」はこの「より大きな完全性への移行」という状態の中に密接に含まれていることになる。言い換えると、「喜び」と「完全性の増大」は「内在的に」結合している。しかし、この「完全性の増大」も、力能、知性、徳、自由、合理性、能動性等の増大と同様の仕方で(内的に)結合しているのである。つまり、「喜び」とは、様々な関係性のネットワークの内で考えなければならないような現象であり、それゆえ、そこを通過する人が変化してゆくようなプロセスである(「自己」の成熟・深化)。であるならば、「喜び」の欠如は深刻に受け止められるべきであり、それは環境保護運動等を推し進めている「責任ある人々」にとって特にそうである[10](Naess,2002,p.172-175;1973b,p.254)。

今日、環境保護運動に携わる人々が、環境劣悪な都会で開かれる環境会議等の仕事によって、自分達が保護しようとしている自然を楽しむことができないでいるというような皮肉な状況がある[11]。しかし一般の人達は、言葉だけで表現され、それをプロパガンダする人自身のライフスタイルでは表現されていないような価値にはひどく懐疑的なものだ。環境保護主義者は、「喜び」なき生活に屈することがあるが、それではよりよい環境への彼ら(彼女ら)の関心は他人にうまく伝わらないはずだ。「喜び」は本来、伝染性のものだが(「感情の模倣」)、その機能もこれでは意味がない。またそのような生活態度は、自然に関わることで生まれる「喜び」の尊重というエコロジー運動の主要な前提条件の一つを切り崩してしまう。環境保護主義者は、今一度「喜び」を価値の優先順位の基準に設定すべきである[12](Naess,1973b,p.249-250,254)。

自然環境保護には、(心の「傾向性」を排除したうえで、道徳法則に従って)「義務に基づいてaus Pflicht」なされるような道徳行為(カント)は必要ない。現実には、それは人々の心に強制や抑圧として働いてしまう。必要なのは、「自己」の潜在的能力を肯定的に展開させることとしての自己実現、つまり「自己」の深化と成熟である。人々の「道徳心にではなく、心の傾向性に働きかけること」によって、「生命の豊かさや多様性、手つかずの自然景観に対する感性が磨かれて、喜びの源が限りなく多様に拡がっていくこと」こそが必要なのである。であるから、環境保護運動の活性化のために、学問的には、「環境倫理学に対する環境存在論と『環境実在論＝現実主義environmental realism』の優越性」が認められるべきであり、こうしてエコロジカルな「自己」が「現実＝実在性」(注7参照)を深く経験して成熟・深化していくことになれば、人間の行動は「厳格な環境倫理の規範に、自然＝本性的にきれいに従っていく」であろう(Naess,1987,p.26;1989,p.85-86)。

ネスのこのような考え方は確かにオプティミズムであるだろう。しかし、それは同時に「深化した現実＝実在主義」でもあった。ガンジーのような「生きることの技法」の達人は、絶望的で深刻な大問題と対峙している時でさえ、常にユーモアと微笑みを絶やさなかったことをネスは強調してやまない(Naess,1987,p.27;2002,p.18,168,169,172,180)。

注

1 <いくつかのディープエコロジー批判の検討>

森岡正博は、ディープエコロジー(以下DEと表記)は、生命の根源にある欲望や執着の醜い面を見過ごし、ただ「近代の二元論を克服し、自然と一体になればよい」とか「みんなが生き生きと繋がりあっていればよい」という浅薄なロマン主義に留まってしまう危険性があると批判する(森岡,1994,p.124)。この指摘は傾聴に値するが、森岡以外の一般的な「理想主義にすぎない」という批判に対しては、本稿で示したネスの「現実＝実在主義」や、世界的規模での「緑の政治」へのDEの影響やかかわりあい、F.カプラらのエコマネジメントの取り組み等を挙げておく。

鬼頭秀一は、「原生自然wilderness」の保存を目指すアメリカ型の自然保護の理念(国立公園に代表される)と近いDEは、元々人手が加わっていない自然などほとんど存在しない日本では通用しないし、そのまま日本に適用するのは危険であるとの懸念を持っているようだ(鬼頭,1996,p.21,59,103,233;Naess,1989,p.53,222-223;282,339)。「手つかずの自然」への礼賛に対する批判を先鋭化し、「ハイブリッドな自然」観を提唱する港千尋にも同様にDE批判が見られる（港,2000,p.31)。ただ鬼頭の社会的リンク論では、昔からその地域に住む「人間の営み」(生業やマイナーサブシステンス)を無視したり抑圧したりするような自然保護は、1992年の地球サミット以来、世界的にも問題になっており、克服されるべきものであるとされる。自然保護の基準は、「人間中心主義VS人間非中心主義」から、その地域での人間と自然の「かかわりの全体性」の回復(切れてしまった「社会的・経済的リンク」と「文化的・宗教的リンク」を「繋いでいく」こと)に重心が移っている(鬼頭, 1996,p.17-18,119-166)。しかし、そもそもDEのプラットフォームの第5原則とその解説では「自然への介入」は絶対的な禁止でなく程度の問題とされ、第3原則とその解説では「不可欠の必要」は「風土やその関連要因の違いを考慮する必要」があり、そこにはイヌイットのスノーモービルまでも含まれるとされている(Naess&Sessions, 1985,p.49-52)。また、最初のDE 宣言論文においてネスはすでに、「多様性と共生の原理」では「人間の生活様式、文化、職業、経済の多様性も支持される」とし、「民族や文化の抹殺」への抵抗を主張していたことも忘れてはならないだろう(Naess,1973a,p.4-5)。そのうえネスの「自己実現」論では、地域の中に埋め込まれた(一体化した)ローカルな「自己」という視点もあった(Naess,1987,p.19)。

また、よくある「DEは独善的、排他的、全体主義的である」という批判は、DEのエプロンダイアグラムにおけるプラットホーム原則の位置付けへの無理解にその多くが起因していると思われるし(Naess,1988,p.10-12;2002,p6-7)、DEの「人間中心主義」批判を極端な人間否定の危険思想であるとはやとちりする論者も目立つが、ネスの「生命圏平等主義」は完全な「人間非中心主義」ではない。人間の「生存に関わる必要」を他の生命のそれに明らかに優先させるという現実主義的な面があり、逆にそこをDEの弱点として指摘する者もいる。しかし、スピノザ哲学の基礎の上に構築されたネスのDEにおいては、人間中心主義対人間非中心主義であれ、主観対客観であれ、人間対自然であれ、およそ単純な二元論的発想の罠には陥らないよう最大限の理論的工夫がなされているので、思想的背景に気をつけて読みさえすれば多くの誤解は避けられるはずである。よって、最も激しいDE否定論者である加藤尚武のDE批判は、おそらく意図的にネスの主張を改変されたうえでのものであろう。両者には意外に近しい主張が見受けられたりもする(加藤,1996,p.169-183)。

このように誤解や批判を受けることが多いDEだが、(特にネスは)人間の持つ多様性や民主主義的価値をも極めて重視しており、決して人間否定主義ではない。

ただし本稿は、あくまでDE（特にネス自身）の理論的基礎の確認と、DEの理論自身に対する無理解からのDE擁護を目指すものであって、DEの様々な実践的展開の全てを肯定し擁護するものではない。この点に関して、例えば、アメリカで1980年代を中心に、官僚主義化してしまった主流派環境NGOを批判し、DEの影響のもとに環境保護の過激な実践（的直接行動）を展開したグループ「アース・ファースト！」の具体的活動内容とそれへの肯定的評価については金森、1999を参照。

2 ネスは、スピノザ的「理性」(合理性)についてこう述べる。「スピノザにとって理性的(合理的)な行為とは、絶対的に最大限のパースペクティブ―そこにおいて、事物は全自然の断片と見なされる―を伴った行為」(Naess,1973b,p.256)である。全生命圏と将来におけるこの生命圏の継続的開花の観点から思考する努力を阻害している保守的なテクノクラシーの擬似理性的思考を破壊できるのは、スピノザのこのような全体的視点を持つ「合理性rationality」だけである(ibid.,p.257)。

3 これは「生命圏平等主義」を表したものである。ネスは、全ての生命は「生き開花する平等な権利」を持っているという「生命圏平等主義」とその根拠としての「内在的本質価値」論を、スピノザの「内在神論」から導き出す。ネスは、スピノザを「汎神論pantheism」(神は万物である)ではなく、「万有内在神論panentheism」(神は万物の内に在り、万物は神の内に在る)であると解釈し、これにスピノザの「神＝能産的自然」命題を加えることで、「全ての生物の内には、創造的力としての神が幾分かは在る」という命題を導き出す。そこからネスは、全ての生物は、「より完全なものとなることや、神の存在の一部としての自らの本性を実現することができる」という結論をしている(Naess,2002,p.82-84)。

4 井上有一は、「ホーリスティックな世界観」と個の自立と尊重に基づく「民主的・市民的価値」が相互支

持的に強く結合して形成されたエコロジー思想・運動が、地域主義とも結びついて発展している姿を、ネスの思想やディープエコロジー運動の一翼を担う「生命地域主義bioregionalism」に見出している(井上,1999,p.79,88-89,99)。「生命地域主義」とは、自分の生活の場である地域(生活の場を共有する人々や他の生命など個的存在を含む)と自己の「一体化(同一視)」に基づいて、「生態系の特徴に適合した自給に基づく持続可能な地域経済を、自治に基づく分権化された政治機構と多様性の尊重に基づく地域文化のもとに築き育てていく努力」であり、1970年代から北米を中心に拡がった(ibid.,p.92,97)。

5 各人の自己実現の度合いに比例して「一体化」の対象範囲が決定されることになろう。ネスはこの対象範囲の上限をガイア(地球)で留めているようにも見えるが(Naess,1987,p.25;1989,p.174,193)、例えばスピノザやマシューズの立場では、「一体化」の対象は全自然=宇宙にまで拡大されるであろう(河村,2002,p.60-66)。

ディープエコロジーから深い影響を受けつつ「トランスパーソナルエコロジー」を展開するフォックスは、「一体化」には、a)「個人的(パーソナル)基盤に立つ一体化」、b)「存在論的基盤に立つ一体化」、c)「宇宙論的基盤に立つ一体化」 の三つがあるとする。フォックスによると、b)とc)のみがトランスパーソナルであり、スピノザ、ガンジー、ネスらは最も高いc)のレベルにある。フォックスはa)の問題点を、「個人的(パーソナル)基盤に立つ一体化」では、自分自身、家族、友人や親類、自分の文化や民族、自分の種というように、「自分と最も関わり深い存在への一体化が最も強くなるのは不可避」だから、「個人、企業、国家、国際関係が、所有、強欲、搾取、戦争、生態系破壊に染まってしまうようなエゴイズムや執着や排他主義を生み出してしまう」点にあるとする。この問題の解決策として彼が挙げるのは、a)を b)とc)の文脈(コンテクスト)の中に、しっかりと位置付けるということである(Fox,1990,p.249-268)。

6 ネスの「自己実現」論へのスピノザのコナトゥス論(及びガンジー)からの影響の分析については、河村,2001,p.108-111およびFox,1990,p.105-114を参照。

7 ただし、「自己実現」と「一体化」から帰結されたこの「自己防衛」の主体を人間のみに限定して考えれば、「一体化」の真意を見逃すことになろう。例えば、「アース・ファースト!」の創設者であり実質的指導者でもあったD.フォアマンは、自然の全ては「『あなた方人間を通して活動すること』によって自己防衛している」と主張し、「私は原生自然の一部として、自己防衛しながら活動しており」、妨害活動(モンキーレンチング)は「地球の側に立った自己防衛である」という言葉を好んで口にしたということも深く考える必要がある (Nash,1989,p.196)。ただし、この「自己防衛」の名のもとに、環境破壊的事業に対する暴力的妨害活動の全てが直接的に肯定されてもいいかどうかは別問題である。

8 『エチカ』第1部定理17備考と定理30証明等参照。ネスは余り理論的に説明してないが、このように、喜びや価値を、単に主観の側での出来事としてではなく、対象(客観) と切り離して考えられない事態、あるいはそれ自体が対象の一部となって共に一つの実在的統一場(自然)を形作っている事態として捉えるような思考法(主客二元論の止揚)は、例えば自然の「内在的本質価値」を形而上学的に証明するのに寄与できるはずだ。ネス自身は、このような「対象重視の価値理論」は「環境の中で快活になることを、『単に主観的な』何かとして退ける傾向があるテクノクラート」を批判するのに有効であると考えている(Naess,1973b,p.254)。

9 この点ネスは、近代科学による「自然の数学化」から「生活世界」を取り戻すことを主張したフッサールに近い。ネスによると、近代科学の「科学的実在性=現実性」は、我々が決してその中に生きてなんかない数学的抽象にすぎない。我々が生きている環境は、実際は、色や香りに溢れ、美しかったり醜かったりする。そういう親しみのある性質のない存在物を探そうなんて全く愚かである。このような直接に経験される世界、生き生きとして喜びに溢れた世界の地位を復権すること、そこにこそ「事実の世界」における「喜び」の場所がある(Naess,1973b,p.258)。

10 スピノザ『エチカ』の賢者の達観した境地である「自己満足=自己のもとに安らうことacquiescentia in se ipso」(ネスの訳ではself-respect, self-acceptance, repose in ourselves, satisfaction,inner peace等)も「喜び」の一種だが、これが現代の科学技術時代には欠けてしまっている。近代生活の諸条件は、安定した高度の「自己満足」の達成に必要な「自尊心」や「自己評価」の十分な発展を妨げている。この「自己満足」の欠如が環境紛争に関わっている人々にも蔓延し、闘いの消極性を生んでいるとネスは指摘する(Naess,1973b,p.253,255;2002,p.172)。

11 ネスはスピノザの「喜び」を、全人格つまり心身の全部分を満たす「快活hilaritas」(常に能動的な喜

び)と、自己の諸部分のみが触発される「快感titillatio」(受動にもなりうる喜び)の二つに分類した。このうち「快感」のみが、過度になって他の喜びに対する受容力を阻害しうるような「喜び」である(『エチカ』第3部定理11備考、第4部定理31,32,42,43,63系)。ネスによると、「仕事の喜びや満足」は「快感」でしかないから、過度になると「人生の喜び」(快活)や全人格的「統合」(成熟)が奪われてしまう(Naess,2002,p.171-174;1973b,p.251-255)。

12 世界の「悲惨」とエコカタストロフィーを悲しむ理由はない。そのような「落胆」は、「未成熟」つまり受動性を克服できずに「統合」を欠いている状態を示す。そのような悲しみの救済策(療法)は、ナイチンゲールやガンジーのように「それについて何かを行うということ」であるが、ガンジーはそれを単に自ら楽しんでいた。スピノザによれば、個人の力は宇宙全体からすれば無限に小さいから、世界全体を救うのは諦めなければならない。それにスピノザ的な「喜びの増大に伴う力の増大」は、他人を強制する力ではなく、自己の本質に従って努力することを実行する力(コナトゥス)の増大であるから、「世界を汚染から救う」ことは誰もが努力する何かではなく、各人が身の回りの事物を救うという制限された努力である(「地球全体主義」の回避)。スピノザ哲学の主要点は「能動性」である。極端な「悲惨」と関わることで「快活」になる人も珍しくはない。それは豊かな社会での特権的な立場を利用して間接的にでも可能である(Naess,1973b,p.251,254;2002,p.173-174)。

文献表

Fox,W.,1990,1995,*Toward a Transpersonal Ecology :Developing New Foundations for Environmentalism*, State University of New York Press.

Naess,A.,1973a, “The Shallow and the Deep ,Long-Range Ecology movement:A Summary”, in : *The Deep Ecology Movement:An Introductory Anthology*, ed.by Alan Drengson & Yuichi Inoue,North Atlantic Books,1995.

——,1973b, “The Place of Joy in a World of Fact”, in: *Deep Ecology for the Twenty—First Century*,ed.by George Sessions,Shambhala,1995.

——,1987, “Self-Realization:An Ecological Approach to Being in the World”, in: *The Deep Ecology Movement*,ed.by A.Drengson & Y. Inoue,1995.

——,1988, “The Apron Diagram”,in:*The Deep Ecology Movement*,ed.by A.Drengson&Y.Inoue,1995.

——,1989,1992,*Ecology,Community and Lifestyle : Outline of an Ecosophy*, translated and revised by David Rothenberg,Cambridge University Press.

——,2002,*Life's Philosophy : Reason and Feeling in a Deeper World*,translated by Roland Huntford,the University of Georgia Press.

Naess,A.&Sessions,G.,1985, “Platform Principles of the Deep Ecology Movement”, in: *The Deep Ecology Movement*,ed.by A.Drengson & Y. Inoue,1995.

Nash,R.F.,1989, *The Rights of Nature:A History of Environmental Ethics*,The University of Wisconsin Press.

井上有一,1999,「ホーリスティックな世界観と民主的・市民的価値—ディープエコロジーとバイオリージョナリズムをめぐって」,所収　講座人間と環境　第12巻　鬼頭秀一編『環境の豊かさをもとめて—理念と運動』,昭和堂,1999.

加藤尚武,1996,『現代を読み解く倫理学』,丸善ライブラリー.

金森修,1999,「エコ・ウォーズ」,『現代思想』,1999年8月号,青土社.

河村厚,2001,「ディープエコロジーのスピノザ受容—A.ネスの場合」,『Humanitas』第26号(奈良県立医科大学).

——,2002,「F.マシューズの環境哲学—コナトゥス解釈を中心に」,『Humanitas』第27号(奈良県立医科大学).

鬼頭秀一,1996,『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』,ちくま新書.

港千尋,2000,『自然　まだ見ぬ記憶へ』,NTT出版.

森岡正博,1994,『生命観を問いなおす—エコロジーから脳死まで』,ちくま新書.

リュック・フェリ,1992,『エコロジーの新秩序』,加藤宏幸訳,法政大学出版局.